

生い茂る自然栽培農場の中で
熱い思いに触れる



慶應大学院生が見た 「フードバレーとかち」の生産現場



年間2万tの長イモがセンサーによって自動的に選別される

私たち慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科アグリゼミは、林美香子特任教授の指導の下、「農村と都市の共生」をテーマとし、さまざまな視点から農業と都市に関する課題に取り組みます。今夏、帯広市役所の

全面的なご協力を得て、「フードバレーとかち」に関する取組みを視察させていただきました。最終日には地元の皆様と「フードバレーとかちと消費者をつなぐ」ワークショップを開催しました。本稿では、多くの視察先の中で特に印象に残った

た所の報告とワークショップを通して感じたことを述べます。

自分たちから求めて行って、消費者に提供する

——折笠農場

「折笠農場」は、28haの農地で自然栽培に取り組んでいます。北海道でも珍しい大規模な木村式自然栽培農場です。その4代目である折笠健さんは、「食卓に30%の自然栽培食品」を目標に、木村秋則自然栽培研究会・北海道の会の会長を務め、自然栽培の普及に尽力しています。

折笠農場ではジャガイモ、大豆、小豆などを栽培していますが、品種の選定

慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科

修士課程2年 鈴木重央





ワークショップ終了後に米沢帯広市長など、地元のみなさんと記念撮影



「フードバレーとかちと消費者をつなぐ」ワークショップ。新しいつながりが新しい発想を生む



若手農業者による「農業本気塾」のメンバーとの懇談会

のために積極的に生育実験や品種比べを繰り返しています。また、北海道農業研究センターとコミュニケーションをとり、協働的に育種しています。なぜ品種の選定にこだわるのか。折笠さんはこう教えてくれました。

「例えば、3年間で10種試せば、病気に強いものが見つかる。誰もができる生産

技術を確立すれば、自然にみんな始めるだろう。さらにおいしければ、消費者も支持してくれる。自然栽培に合った品種をいち早く見つけるかどうか、の勝負。実験や食べ比べをすれば、育種する研究者への要求事項も決まる。トマトの『桃太郎』のように品種が代われば、生産・流通・販売の効率も良くなる」

折笠農場の能動的な取組みは、消費者のみならず、研究機関・農家・流通業・販売業など農業にかかわるあらゆる方向を指向しています。その結果、地域のネットワークにおける一つの中心的な役割を担うことがで

きるのです。

ネットワークづくりは 自ラリスクを負うことから — J A帯広かわにし

帯広市の「J A帯広かわにし」は、全国シェア15%を持つ長イモの一大産地であり、規格外品の台湾への輸出にも成功しています。輸出成功の鍵は、十勝管内8農協の広域連携による生産体制です。

そもそも輸出の目的は、長イモの国内価格を落とさないことと、規格より大きい長イモの活用でした。そのため輸出のための生産は行われておらず、海外への安定供給は難しいと言えま

す。そこでJ A帯広かわにしは十勝管内の8農協と協力し、安定した供給量確保に成功しました。長イモには、洗浄・箱詰め施設が必要で、J A帯広かわにしの選果場は平成3年に20数億円かけ、作られました。その費用はJ A帯広かわにしのみが負い、連携する他の農協は一切負担していません。

常田馨氏（青果部長）によると「減価償却費だけでも多額で、他の農協に辞められると潰（つぶ）れてしまう」ほどのリスクだと言う。自ら大きなリスクを負うことで、広域ネットワークの確立と安定供給、海外輸出、農家の所得増を実現させているのです。

フードバレーとかちと 消費者をつなぐ「ワーク ショップを通して

8月30日、彩り豊かなガーデンに囲まれた「十勝ヒルズ」でワークショップが行われました。参加者は、

帯広市・帯広畜産大学・地元企業・慶應義塾アグリゼミの計22人で、「消費者が十勝の『お気に入り』に出会うには、どうすればよいでしょうか？」という課題に対し、3チームに分かれアイデアを出し合いました。

ワークショップでは、「十勝の小麦を使った麦わら帽子」「十勝十品ファーマーズバーベキュー」「農機具チャロQ」など、小さくさまざまなアイデアが議論され、盛況のうちに幕を閉じました。ワークショップを通じて、十勝の皆さんからアイデアが堰を切ったように溢れ出したことに驚きました。用意した模造紙がアイデアでいっぱいになってしまいました。地域活性化のワークショップの有用性を再確認するとともに、地域に眠るたくさんアイデアを吸い出し、集約し、実現していけるような仕組みをつくっていききたい、という思いを胸に刻みました。